様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２１ 日現在

機関番号：３２６３１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ００４７９

研究課題名（和文）フランス・ロマン主義文学における共属意識に関する総合的研究

研究課題名（英文）Study on the co-attributional consciousness in French Romantic literature

研究代表者
畑　浩一郎（HATA, Koichiro）

聖心女子大学・現代教養学部・准教授

研究者番号：２０５１４５７４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：19世紀前半のフランスは、中近東やアフリカといった、これまでヨーロッパとの接触が限られていた地域に接近し、関係を深める。その中で、ロマン主義時代の文学者たちは、さまざまな指標ー民族、言語、宗教、習慣ーを用いて、「自他」の線引きを行なう。本研究が着目したのは、彼らの認識がしばしば単なる二元論を越え、本来「他者」として現れるべき人間に対して、奇妙な「親近感」を抱くことがあるという事実である。本研究ではそれを「共属意識」と名づけ、その文学的な表れを考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
計5年にわたる研究期間において、主に2本の軸を設定して考察を行なった。ひとつは、ギュスターヴ・フロベールが1848年に友人マキシム・デュ・カンとともに行なったオリエント旅行についての分析である。『ボヴァリー夫人』や『感情教育』の作者として知られるフロベールだが、彼の近東旅行に関してはこれまでまとまった研究はなかった。二つ目の軸は、ポーランド出身の大貴族ヤン・ポトツキの残した小説、紀行文についての検討である。日本ではまだほとんど知られていないこの大作家の著述を通じて、19世紀ヨーロッパにおける「自他」のありようを考察した。

研究成果の概要（英文）：In the first half of the 19th century, France approached and deepened relations with regions that had previously had limited contact with Europe, such as the Middle East and Africa. In this context, literary scholars of the Romantic period used various indicators - ethnicity, language, religion and customs - to draw a line between 'self and other'. This study focuses on the fact that their perceptions often transcended mere dualism, and that they sometimes felt a strange 'kinship' with people who were supposed to appear as the 'other'. This study named it 'co-attributional consciousness' and examined its literary manifestations.

研究分野：フランス文学

キーワード：フランス文学　ロマン主義　オリエンタリズム　共属意識　旅行記

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

エドワード・サイードが『オリエンタリズム』（1978）で指摘して以来、世界を「西洋」と「東洋」という二項対立で捉える認識は、近代ヨーロッパがかつてアジアに対して一方的に押しつけた独善的な見識であるという批判が見られる。植民地拡大を推進する西洋諸国は、自分たちとは異なる存在を「オリエント」、「東洋」といった名称で総括的に括り、それを管理すべき「他者」として捉えるという方向に向かう。サイードの指摘は、18 世紀以降の西洋がアジアに対してふるってきた暴力と支配のメカニズムをえぐり出し、ポストコロニアル理論への道を開いた。

本研究の代表者は、2005 年にフランス・パリ第４大学に提出した博士論文を出発点に、19 世紀前半のフランス文学において、「他者」としての東洋がどのように表象されてきたかという問題に取り組んできた。考察の対象となるのは、原則として文学者の直接の旅の経験を描き出すとされる旅行記に始まり、作家の想像力を起点として生み出される小説、さらには詩作品まで、多岐に渡る。その考察の途上で、サイードの指摘の正しさを再確認すると同時に、また別の違和感を感じることもあった。それは、本当に当時のフランスの文学者たちは、「西洋」対「東洋」などという単純な構図で満足していたのだろうかという疑問である。

こうした違和感、ないし疑問は、詩人アルフォンス・ド・ラマルチーヌ（1790-1869）の著作を読み進めるうちに深まった。ラマルチーヌは、1830 年、1849 年と二度にわたり中近東諸国を旅している。彼の残した旅行記や書簡を見ると、ラマルチーヌは生涯を通じて、自分は本来フランス人ではなく、自らのルーツは東洋にこそあるという妄想に捉えられていたことが分かる。このような「自他の逆転」という発想は、決してラマルチーヌ個人に特有なものではない。他にも、後期ロマン主義の文学者テオフィル・ゴーチエ（1811-1872）などにも強く見て取れる。

サイードに始まるオリエンタリズム論、さらにはそれに接続するポストコロニアル理論の拠って立つ思想的・文化的・歴史的基盤に再検討の余地はないのか、あるとすれば、どのようなアプローチによってそれが可能となるのか、先行研究、方法論、コーパスを含めて全面的な問い直しの必要を感じたことが本研究の開始当初の背景にある。

２．研究の目的

本研究の目的はシンプルである。１の「研究開始当初の背景」で述べたように、20 世紀後半の西洋歴史思想で主流であったサイードのオリエンタリズム論が提出する世界観に一石を投じることにある。ただしサイードのように、歴史、思想、芸術、学問、政治、外交といった大きな枠組みを設定するのではなく、研究対象をあくまでフランス・ロマン主義時代の文学作品に限定し、より具体的な作家の世界観、認識を抽出することを試みる。

19 世紀前半のフランス人文学者たちが、いかにして西洋キリスト教世界とは異なる文化・文

明と対峙し、自らの立ち位置を再確認したのか。旅行記や小説、詩作品といったさまざまな文学ジャンルを横断する形で、こうした問題を総合的に考察することが本研究の目指す方向となる。

そのための補助線として、「共属意識」という概念を設定する。それは、従来の古典的な区分―民族、言語、宗教、風習など―を超え、文学者たちが自由に設定する自他のあり方である。実際、エジプトを旅するギュスターヴ・フロベール（1821-1880）は、現地でひとりのアラブ人のキリスト教徒と出会うことで、この問題について深い考察を行なっている。彼にとっては、信仰よりも言語の違いにこそ仲間意識のよすががあるのだ。こうした作家の考察をひとつひとつ掬い上げ、それらを比較検討することで、フランス・ロマン主義時代の新たな文明観を提示することが本研究の最終目的となる。

３．研究の方法

19 世紀フランス文学における「他者」の表象をめぐっては、本研究の代表者にはこれまでの考察の蓄積がある。本研究ではそれに加えて、主にふたつの軸を設定して理解を深めた。ひとつはフロベールが 1849 年に、友人のマキシム・デュ・カン（1822-1894）と行なった近東旅行に関する記録にまつわるものである。『ボヴァリー夫人』（1856）、『感情教育』（1869）などの著者として、フロベールはフランス文学を代表する大作家と見なされるが、彼が若い時期に行なったこの旅行についての研究はまだほとんど進んでいない。旅先でフロベールが執筆した草稿、また家族や知人に送った書簡を読み解くことで、若い作家がヨーロッパとはまるで異なる世界をどう受け止めたのかを考察する。またフロベールの記述を、友人デュ・カンが帰国後に刊行した『ナイル川』（1853）の内容と照合する。その作業を通じて、ふたりの文学者が感じた「共属意識」のありようが明らかになる。

もうひとつの軸は、ポーランド出身の大貴族ヤン・ポトツキ（1761-1815）の残した著作を検討することである。ポトツキは幼少期にフランス語による教育を受け、以降、生涯にわたってこの言語でものを考え、執筆を行なった。フランス・ロマン主義文学における「共属意識」のあり方をめぐる考察において、ポトツキの置かれた位置、ならびに彼の著作がもたらす知見は貴重な判断材料となる。「他者」とはいかなる存在なのかを考える以前に、そもそも「西洋」というのは本当に一括で括れる概念なのか、今一度の問い直しが必要となる。ポトツキが書いた数々の紀行文―とりわけ『トルコ・エジプト紀行』（1788）、『モロッコ帝国紀行』（1792）―は、時代的にフランス・ロマン主義とはやや外れるものの、極めて興味深い記述にあふれており、何よりも彼の残した唯一の小説『サラゴサ手稿』（1810）は、本研究にとって第一級の重要性を持つ考察対象となる。キリスト教、イスラーム、ユダヤ教という三大一神教の歴史と教義を軸に置きつつ、枠物語という形式によって、地中海沿岸全域を舞台とするこの作品は、「自分とは何か」、「他者とは何か」という共属意識のありように本質的な光を投げかけてくれる。

４．研究成果

延長 2 年を含めた、計 5 年間の研究期間で、5 本の学術論文、3 回の学会発表（うち 1 回は国際シンポジウム）、6 本の雑誌記事（うち 5 本は連載）、さらにヤン・ポトツキ『サラゴサ手稿』（上、中、下巻）の個人訳を発表することができた。最後に掲げた翻訳の成果物については、第 29 回日仏翻訳文学賞（小西国際交流財団）を受賞することができた。

研究の軸のひとつ目に据えた、フロベールの近東旅行にまつわる記録については、一定の成果を収めた。彼にとっては、キリスト教という信仰は共属意識を構成する要因には決してなり得ず、言語的なアイデンティティこそが個人間の紐帯として機能するという考えが何度となく提示される。この事実は、近東旅行の直前に最初の原稿を執筆して以来、30 年近い歳月にわたって改稿し続けた『聖アントワーヌの誘惑』（1874）や、北アフリカ・カルタゴを舞台にした歴史小説『サランボー』（1883）を理解する上で、決して無視でき得ぬ事柄となる。

軸の二つ目であるポトツキの著作については、無視できぬ成果は得られたものの、まだ研究途上にある。彼の紀行文が執筆された時期の、ヨーロッパ諸国と地中海沿岸地域にまつわる政治的、文化的、学問的背景が未だ十分に把握しきれておらず、結果的にポトツキが残した数々の興味深い証言について、十分な吟味が成し得ていない。これらは今後の検討課題となる。しかしながらポトツキの紀行文、ならびに小説『サラゴサ手稿』は、当時のヨーロッパ知識人の共属意識に関して極めて重要な資料となることが確認できた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 畑　浩一郎	４．巻 第141集
２．論文標題 ヤン・ポトツキと東洋言語ージョゼフ・ド・メーストル宛の書簡をめぐって	５．発行年 2023年
３．雑誌名 聖心女子大学論叢	６．最初と最後の頁 3-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 畑　浩一郎	４．巻 55
２．論文標題 「学問と宗教の相剋ーヤン・ポトツキ『サラゴサ手稿』（1810年版）をめぐって」	５．発行年 2022年
３．雑誌名 『仏語仏文学』　中地義和先生退職記念特集号、東京大学仏語仏文学研究会	６．最初と最後の頁 89-107
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 畑　浩一郎	４．巻 第138集
２．論文標題 フロベールの見たエジプト	５．発行年 2021年
３．雑誌名 聖心女子大学論叢	６．最初と最後の頁 3-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 畑　浩一郎	４．巻 第135集
２．論文標題 ヤン・ポトツキと『サラゴサ手稿』	５．発行年 2020年
３．雑誌名 聖心女子大学論叢	６．最初と最後の頁 3-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 畑　浩一郎	4．巻 第134集
2．論文標題 『サラゴサ手稿』における人知と学問の意義	5．発行年 2019年
3．雑誌名 『聖心女子大学論叢』	6．最初と最後の頁 41-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　3件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 Koichiro HATA
2．発表標題 Jean Potocki et les langues orientales
3．学会等名 Les signes du temps. Jean Potocki historien et ecrivain/16e Congres de la Societe Internationale d’etudes du Dix-Huitieme Siecle（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2023年

1．発表者名 畑　浩一郎
2．発表標題 ギュスターヴ・フロベールの見たエジプト
3．学会等名 十九世紀フランス文学研究会（招待講演）
4．発表年 2022年

1．発表者名 畑　浩一郎
2．発表標題 カミュの『ペスト』を読む
3．学会等名 第45回地中海学会大会　地中海トーキング「地中海が見た病と健康」（招待講演）
4．発表年 2021年

〔図書〕　計3件

1．著者名 ヤン・ポトツキ著　畑浩一郎訳	4．発行年 2022年
2．出版社 岩波文庫	5．総ページ数 506
3．書名 『サラゴサ手稿』上	

1．著者名 ヤン・ポトツキ著　畑浩一郎訳	4．発行年 2022年
2．出版社 岩波文庫	5．総ページ数 442
3．書名 『サラゴサ手稿』中	

1．著者名 ヤン・ポトツキ著　畑浩一郎訳	4．発行年 2023年
2．出版社 岩波文庫	5．総ページ数 456
3．書名 『サラゴサ手稿』下	

〔産業財産権〕

〔その他〕

https://researchmap.jp/kmk/published_papers/29271571

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関